
幸せの廃棄物

両角忘夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幸せの廃棄物

【Nコード】

N2265A

【作者名】

両角忘夜

【あらすじ】

虐め。家庭不和。リストカット。宗教信者の母。自分はロボットだと語る少女。黒羽根の天使。美しい廃棄物。精神病院。自殺したいと願う少女が、世界との和解を決意するまでの物語。

1・クダラナイ世界

眠剤を多めに飲んだのに眠れず、音楽を聴いていた。

天井に逆さまに座っていた、黒羽根の天使が下りてきて、あたしの耳に冷たいキスをした。悲しい気分を満たされる。

窓の外に積もった雪が乳白色に輝きだす。くだらない一日が始まる前に終わらせたい。カッターを取り、机に置いた左手首に突き立てた。

天使が歌うように囁く。「もつと深く、……深く」

鮮血が滴る。

その頃の東京には、こんな宗教が流行っていた。

自殺したら、その魂は汚れてしまう。一度ついた汚れは拭うことができず、成仏できずに、命の輪にも二度と加えてもらえない。いつまでも苦しみながらさ迷う。だから自殺はやめましょう。

2

どのくらい時間が経ったのか。ドアが乱暴に叩かれ、こじ開けられた。入ってきたママとオジサンが、うるさい声で何かを叫んでいる。

「静香……！」

やめて。あたし、そんな名前じゃない。

そんなに揺さぶらないでよ。頭、痛いんだから。

黒羽根の天使は、ママやオジサンが部屋に入ってくると姿を消してしまふ。あたしもそんなふうに、きれいに消えてみたかった。

だけど、この程度のリスカじゃ死ねない。いつもより深く切ったから、一週間くらいは学校休めそうだけど。

救急車にはオジサンも乗り込んできた。独り言がよく聞こえる。

弱ったな。またやられた。何が不満だ。忙しいのに。面倒なら助けるなよ。

あたしが死んだからって、あんたにとって何だっていうの。自分の命は自分のもの。どうして勝手に死んじゃいけないんだろう。

ママはあの宗教の信者だから、今ごろ家でお祈りしているはず。居間に置かれた安作りの祭壇の前に座り、神妙な顔で手を合わせる娘を正気に戻して。自殺なんかしないで。

週末には集会所に出かけ、退屈な講話を聞いたり、歌を歌ったりする。いくらかのお布施もするらしい。

ママがいくらお祈りしたって、あたしが学校でゲロ野郎どもに虐められる毎日が変わらない。本当の父親を忘れてオジサンをパパとは呼べないし、わざとらしいママの笑顔にも疲れた。

この世界が大嫌いなんだ。あたしから死を奪うな。

黒羽根の天使は、むしろこう言ってくれた。

「自分の意志で死にきつた者は幸せになれる」

これがあたしの宗教。

だから死んでやる。

オジサンはあたしを病院に送り届けると、さっさと帰ってしまった。

数日して、あたしは別の病院の閉鎖病棟に入れられた。

そこは狭くて退屈な場所だったから、病気が落ち着く人もいるが、余計病んでしまう人もいたみたいだ。

娯楽がほとんどない。テレビカードがなければテレビが見れないし、電話も自由にかけれない。

仕方ないから、みんな一日ベッドの上でぐったりしてるか、短い廊下を何往復も歩き回る。格子のはまった窓からは雪深い山が間近に見えたから、ずいぶん遠くの病院まで来たんだと実感させられた。時間がくると詰め所の前に並び、薬を渡された。飲むと頭がボー

ツとするし、しばらく登校する心配もないから気持ちはラクになった。

「だけど、自殺したいって思うのは病気なの。」

「そんなことないさ」

黒羽根の天使の声がした。

「病気なのは世界の方だ。こんなクダラナイ世界、終わらせなくちゃいけない」

「どうしたら世界を終わらせられるの」

「君が死ねば、すべてが終わる」

「そうだ。こんな世界は終わらせるしかない。」

クラスのゲロ野郎たち。ひどい暴力を受けた。服や髪をライターで燃やされ、唾をかけられ、キタナイと言われた。土下座しても許されなかった。

勇気を出して、泣きながらホームルームで訴えたのに、虐められる側に原因があるかのように言われ、なぜかあたしの糾弾大会になった。最後に何もわかっていない先公が、「でもみんな、なんだかんだ言って静香ちゃんのことを好きだから構うんだよね」と言い、全員がゲラゲラ笑った。

あたしの傷まで、「ミミズみたい」と笑い飛ばした奴ら。全員死ね。いなくなれ。

2・片木律子

同じ病室に、自分はロボットだと言う女の子がいた。動作がギクシヤクしていたが、操られているからだと言う。

「カリクメサン、オトナシサン……」

よく聞き取れなかったが、そんな独り言を呟いていた。造語だらうか。

眼鏡をかけた太った女の子。左後頭部に円形脱毛がある。枕元に古い号の漫画雑誌。そんな彼女が、なぜか気になった。

話しかけてみる。

「こんにちは」

「はい」

「あたし、リスカで入れられちゃったんだけど、あなたは？」

「私はロボットで。途中から入れ換えられてしまいました」

「えっ、何それ」

「ロボットにされてから、遠隔操作されて。私が変わだから、お母さんも私を疑います」

「そんなことないよ。あなたは人間でしょ」

「ロボットです」

初めはそんな会話だった。

別のある日。今度は向こうから話し掛けてきた。

「あ、静香さん」

「ごめんね。それ、あたしの本当の名前じゃないの」

「あなたもロボット」

「ううん、そうじゃないけど。あたしは天使から、死後の名前を貰ったの。だからその名前、言われたくないんだ」

「私は空間手術でロボットにされ、家ではお母さんが毎日」

「あれっ、もう名前の話題はいいの？」

「カリクメサン」

「それも、名前みたいだね」

「オトナシサン」

「なんか笑える。あなた、不思議だよ」

「片木律子と言います」

「あ、片木さんね。よろしく」

あたしは彼女に、自分の本当の名前を言うべきか迷った。天使からは、誰にも教えちゃいけないと言われている。

「あのね、あたしの本名は長くて難しいから、ここでは全部言えないの。スーシーって呼んでもらってもいいかな」

「スーシー」

「そうよ、片木さん。あなたは这个世界と自分と、どちらが間違っていると思う？」

「ロボットですけど」

「どうして、あなたはロボットなの」

「二十四世紀に訊いてみます」

「二十四世紀って？」

「私はそこから、操作されています」

「面白いね。片木さんは」

そのとき、あたしにはまだ、片木律子の本当の悲しさがわからなかった。

8時と12時と18時になると音楽が流れ、みんな一斉に廊下に出る。ワゴンから各々の食膳を受け取る。

拒食の患者は詰め所の前に集められ、看護師に監視されながら無理矢理食べさせられていた。

ご飯はベチヨベチヨ。味噌汁は変な臭い。オカズは油まみれで、まるで豚の餌だ。これじゃ拒食を治すどころか、食事がよけい嫌いになりそう。

拒食患者の仲間に入れられ、見張られるのは嫌だったから、我慢して半分だけは食べた。だけど片木律子は、こんなマズイ料理でも残さず食べてしまう。

「片木さん、すごいね」

「はい」

「あたし、ここの料理嫌いなんだけど、いつもよく食べれるよね」

「わかりませんが」

「えっ」

「わからないです。ご飯のことは」

「美味しいとか、マズイとかは」

「わかりません。私に味覚が必要でしょうか」

「えと、それじゃ、なんで美味しくないのに食べちゃうの」

「空間操作ですから。スーシーさん」

片木律子と話していると楽しかった。二人で過ごす時間が増えてから、黒羽根の天使は現れなくなった。

変テコで面白い会話は、嫌なことを忘れさせてくれる。だけど、戸惑いもある。いくら彼女と仲良くなれても、クダラナイ世界はな
くならない。ここを出たら、また虐められる。

今度こそ、ちゃんと死ななくっちゃ。

3・手紙

一ヶ月してあたしは開放病棟に移され、さらに二週間を過ごして退院した。

片木律子は統合失調症という病気で、もう三年くらい閉鎖に入れられているらしい。また会えるだろうか。

退院してからのあたしは、もう学校には行かなかった。一週間に一度、精神科外来に通い、せっせと錠剤を溜めた。

黒羽根の天使も、また現れるようになった。毎晩、あたしたちは語りあう。

たまに苛ついて、リスカもした。だけど今度は計画的に死ぬつもりだったから、再び病院に入れられないよう、浅くしか切らなかった。

「あのさ、死ぬ前にやりたいことが出来ただけだ。これは未練じゃないよ」

「わかってる」

「あたしを虐めた奴ら、何人が殺してから死にたいんだ」

「そうだな」

「あとね、片木律子だけはクダラナイ世界の住民ではない気がしたんだけど、どう思う」

「彼女はすでに、この世の者ではないからな」

「えっ」

「彼女は君に言ったはずだ。自分はもうロボットと入れ代わってしまったと。本当の片木律子は、もういない」

「そんな」

「なぜ、驚いている」

あたしは、このとき初めて天使の言葉に違和感を覚えた。

「じゃあ、あたしが仲良く話していたのは本当にロボットなの」

「仲良くできたなんていうのも、思い込みさ。ロボットは心を開か

ない。片木律子も」

あたしは彼女に手紙を書くことにした。「お元気ですか」に始まる短い文章だったが、返信はこなかった。

食事はいつも、ドアの前までママが運んでくる。誰もそこにいないことを確認してから、あたしは静かにドアを開けた。ほんの少し口をつけ、残りは廊下に返しておく。

けれどその日の晩は、久しぶりに自分から居間に出て、ママと一緒に食事をした。

「あの人はいないの？」

「パパなら遅いわ。仕事、忙しいから」

「ママはさ、あの人のどこが好きなの」

「そんなの、静香に関係ないでしょ」

なんでそんな言い方をするのか。「じゃあ、あたしもあの人の、絶対パパとは呼ばないから！」

するとママも声を荒げ、「あなたは自分じゃ何もしないで、どうして周りの人には文句ばかり言うの」

「周りの人、関係ないじゃん。どうしてあたしが、ママに気持ちぶつけちゃいけないの」

「ああ、もう、やめて」

「わかったよ。話さない」

「いつもそうやって拗ねる」。大袈裟な溜め息をつき、「わたし、もう、あなたの親でいることに疲れたわ」

あたしだって、好きで産まれたわけじゃない。

「うん、いいよ。今まで、愛してくれなくてありがとう。今度はほんとに死んであげるから、止めないでよね」

こんな言い争いをする為に、居間に出てきたんじゃないか。あたしはただ、片木律子からの手紙が届いていないか、訊きたかっただけだ。

部屋に戻ると、ドアの向こうで皿が割れる音、嗚咽する声が聞こえ、やがてお祈りの言葉が聞こえてきた。

ばかみたい。

世の中や、自分たちの境遇を振り返れば、神様があたしたちの味方じゃないってことぐらいわかる。

辛くなりそうだったから多めに薬を飲み、明るい音楽をかけ、ベッドの上でゲロ野郎たちの殺し方を考えた。黒羽根の天使の視線を感じながら。

いつの間にか眠ってしまったらしい。夢を見た。

教室でゲロ野郎たちに囲まれ、あたしは相変わらず虐められていた。チャイムが鳴り戸が開くと、ギクシヤクした動作の片木律子が入ってきて、黒板の前に直立する。眼鏡がずり落ち、首から火花を散らしながら震えだす。指が床に落ちて転がる。肩が取れて分解し、錆の浮いたスクラップになってしまった。

みんなは、それを見てゲラゲラと笑った。

目が覚めたあたしは、いつまでも悲しかった。

4・知らない男

死ぬ前に、もう一度だけ、と思い、手紙を書いて投函した。そのときのあたしの気持ちを全部書いた長い文章で、遺書のつもりだった。

一週間だけのつもりで返事を待っていたら、六日目に病院から一枚の葉書が送られてきた。

そこには汚い字で、「スーシーさん。二十四世紀が、お母さんに会いたがっています」とだけ書かれてあった。

何もあたしの言葉に伝えてくれなかったが、それでも彼女が「スーシー」という名前を覚えていてくれただけで嬉しかった。

けれど、文章の意味はよくわからない。思い切って、病院に面会に行こうと考えた。

ママがいらないのを見計らい、家を出た。久しぶりに外を歩くと、風景が眩しく迫って目眩がした。

車道を行き交う自動車が、自分に向かって飛び込んできそうで怖い。歩道の脇に逃げるが、塀に沿って黒ずんだ残雪が固まっただけで、転びそうだ。

後ろから耳障りなベルの音が近づき、自転車に追い抜かれる瞬間に舌打ちされた。あたしがそんなに邪魔だったんだろうか。こんな道を平気で飛ばしていく自転車を、信じられない気持ちで見送った。まるで、映画の世界に入り込んでしまったような違和感。足が竦み、深呼吸する。

駅につき、切符を券売機で買おうとしたら、小銭を数えられずに困った。財布のなかの千円札をあるだけ入れ、一番下のボタンを押す。

電車に乗り込んでから、間違えて別の線に乗ってしまったことに気づいた。車内アナウンスが早口で、知らない駅の名前を告げる。気持ち焦るが、どこで乗り換え、引き返せばいいのかわからない。

あたしは壊れてしまったのか。

他の乗客が笑いながら見ている気がし、何度も確認してしまう。ケータイも置いてきたから、助けも呼べない。

ママ！

あんな言い争いをしたあとで、いまさら都合良すぎると思いながら、あたしはママに助けてほしいと願った。

黒羽根の天使の姿もない。彼は、あたし以外の人がいる場所は嫌いだ。

そのとき、「大丈夫か、静香ツ」。懐かしい声で呼ばれた。顔を上げるとパパだった。

いなくなっただけの、本当のパパ。

気がつくとき、あたしはベッドの上にいた。

知らない男が横にいて、煙草をふかしている。あたしたちは裸だった。

「お前、ラリってんじゃないの」。男が言った。

すべてがわかって、涙が込み上げた。

初めてのラブホテル。パパだと思った男に連れ込まれたのだ。

「ちゃんと帰れるか」

あたしは応えなかった。

「お前さ、痩せてるけど、ちゃんと飯食ってんの」

その一言で、あたしは彼が、もしかしたら優しい人かもしれないと思った。でも、そんな思いは次の一言で打ち消される。

「気持ちよかったから、もう一回ヤツてもいいか」

感情のないセックスのあと、あたしは男に、片木律子が入院する病院への行き方を訊ねた。

「車で連れてってやるのか」。男はそう言い、あたしは首を縦に振った。

5・殺したい

男の車は銀色のミニバン。助手席に座ると、ヤニで黄色くガラスが曇っている。

建物の駐車場を出ると、日が落ちた街に艶やかなネオンや街灯が燈り、綺麗だと思う。

「お前、どうして自殺したいわけ？」。男が訊いてくる。

車は国道に入ると速度を上げた。あたしは男の質問に応えず、道の彼方に広がる暗闇を見つめていた。

「手に傷あるし。痛くないのか」

「……」

「だから精神病院に行くわけ？」

「あたし、最近までそこに入院してたし、友達もまだいる」

「あのさ、俺だって昔はヤケになって死にたくなっただけど、そんな勇氣あるなら、もっと明るく考えて……」

ありきたりな励まし。会話する時間が空しい。

「趣味を持つとか、若いんだし、頑張ればいいじゃん」

「頑張つても、変わらないよ」

「じゃあ、なんで死にたくなるんだ」

「……」

「カワイイ顔してんだから、もったいないだろ」

もう喋りたくなかった。

指をかけ、ドアを開ける。

「危ねえ！」

男がブレーキを踏んだ。

後続のタクシーがクラクションを鳴らし、追い抜いていく。

「なにすんだよ」

「もう、ここでいいから」

「ここであつて……。病院はまだ遠いぞ。それにお前、何処にいるの」

かわかってんのか」

「あそこにマンションあるよね。今から飛び下りて死ぬよ。さよなら」

外に出ると、男は車を脇に止めて追い掛けてきた。

「ついてこなくていいよ。関係ないんだし」

「ばかやろう。自殺する奴をほっとけるか」

「ついてくんないよ。あんたみたいな人間が嫌いだから自殺するんだ」

男は立ち止まって叫んだ。

「どうして俺が嫌いなんだ！」

「だってあたしに、ひどいことしたくせに」

「なんでだよ。お前だって、同意したからホテルに入ったんじゃないか」

「あたしが倒れたことをいいことに、無理に連れ込んだんでしょ。」

誰があんたみたいなのゲロオヤジと寝たいと思うか」

あたしはまた歩きだした。男が続ける。

「だったら謝る。だから死ぬなよ」

「関係ないでしょ。あたしが飛び下りたら、あんたも警察に調べられて面倒だから嫌なんですよ」

「お前が、好きだからだよ」

「えっ」

あたしは驚いて振り返った。会ったばかりで何も知らないくせに、どうして「好き」なんて言えるんだろう。

「あたしが若い女だから、そんなこと言ってるだけでしょ」

「違う。なんか俺、お前が可哀相になったんだ」

「可哀相だから好きですって」

「そうだよ。悪いか」

いいことを思いついた。この男を使おう。

「じゃあ、あたしのために人を殺してよ。あたしを虐めたゲロ野郎を全員殺して」

あたしたちは睨みあった。

男のケータイを借り、家に電話をした。

「もしもし」

「静香なのッ」。ヒステリックなママの声。「何処にいるの。心配してるから、早く帰ってきなさい」

「あのね、ママ。いま友達といて、しばらくその子のウチに泊めてもらうから」

「友達って誰」

「ママの知らない人」

「そんな……。ね、静香。あなた、まだ病気なのよ。みんなに迷惑かけるんだから戻ってきなさい」

「ママだって知らない人と暮らしてるんだから、いいじゃん」

「どうして、そんなことばかり言って……」

応えずに電話を切った。

できればベッドの下に隠しておいた沢山の薬と、何枚かのCD、着替え、ケータイを取りに戻りたかったが諦めた。

もう母親と話すこともないだろう。

次にゲロ野郎の一人で、小学校の頃は友達だった順子の家に電話した。

本当はもつと殺したい奴がいたが、順子の電話番号しか思い出せなかったし、あたしが呼び出して出てきそうなのも彼女しかいない。

「もしもし……、久しぶりだね」

「静香ッ、どうしたのよ。みんな心配してるよ。お母さんからもうちに電話かかってきてさ」

「……ねえ、なんでそんなふうに友達ぶって喋れるの？」

「えっ、だって……」

「あたしが虐められても笑ってたくせに」

「……」

「あ のとき、あたしがどんなに絶望したかわかる？」

「わかるよ。ごめん」

「わかるわけないよ。あたしが本気で死ぬつもりでも、信じてくれないしね」

「信じてるよ。だから相談乗ったじゃん」

「じゃあどうして、みんなに話して笑い者にしたわけ」

「……明るくした方がいいと思っただよ」

「ここで死んでみるとか、あれが明るくすることなの？」

「ごめんなさい」

「もう遅いよ。あたし、今度はほんとに死ぬから」

「静香、何処にいるの」

「なんで訊くのよ」

「こんな電話じゃなくて、ちゃんと会って話したいから。謝りたいよ」

あたしは一旦電話を切り、男と相談して場所と時間を決めた。
電話をかけ直す。

「絶対、一人だけで来て。誰にも言わないで」

「うん、わかった」

6・ゲロまみれ

翌日の午後7時、約束した駅の改札に、確かに順子は一人きりでやってきた。

おどおどする彼女をミニバンの後部座席に押し込み、あたしも並んで腰を下ろす。

「走っていいよ」

運転席で待機していた男は振り向かず、アクセルを踏み込んだ。

「この人は？」

「あたしをレイプした人」

「えっ」

「何言ってるんだ。同意の上でヤツたんだろ」

「覚えてないけど」

順子は体を小さくし、「私、静香と二人きりで話したい」と言った。

無視する。

「何処、行くの」

「話しやすいところ」。ぶつきらぼうに応えた。

順子がケータイでメールを打つそぶりを見せたので取り上げ、窓を開けて投げ捨てた。

「ひどいと思ったでしょ。けど、あんたらだって、あたしのケータイ取り上げて壊したよね」

「ごめん」

「本気で悪いと思ってる？」

「思うよ」

「だったら、あたしを殺してよ」

「そんなの、できないよ」

「じゃなきゃ、あんたを殺すから」

男に、国道沿い見えてきたファミレスに入るように言う。

「死ぬ前に、お腹空いたから何か食べよう。久しぶりだね。あたし
たち一緒に食べるの」

「静香……」

家族連れ、カップル。平和な店内にあたしたちのテンションは異
様だ。店員も雰囲気を感じたのか、奥の席に案内される。男は苛立
たしげに煙草を取り出し、吸い始めた。

「俺、ビール飲むぜ」

「飲酒事故で死ぬのもいいわね。じゃ、あたしたちも付き合っから」

「私、アルコール駄目だよ」

「なんだ、いいじゃん。食べ物も頼もう。唐揚げと餃子と豆腐ハン
バーグ」

ジョッキビールと料理が運ばれてくる。

「お金はこの人が払うから、気にしないで。ケーキも食べようか。
ほら、ちゃんと飲んで」

「ビールにケーキか。最低だな、お前」

「うるさいわね。あんたも、もっと飲みなさいよ」

「ごめん、静香。私、トイレ行きたくなった」

「じゃ、あたしもついていく。逃げられちゃ嫌だから」

「お前らトイレに行ってる間に、俺の方が逃げちゃうかもよ」

「駄目よ。あなたも重要な役なんだから。なんなら、殺す前にこの
女、抱かせてあげてもいいよ」

「もう、そんな気ないよ、俺」

狭いトイレの個室に、二人で一緒に入る。

「恥ずかしくて、出ないよ」

「あたしだって、もっと恥ずかしいことされたでしょ」

「でも」

「ふざけんなツ」。頬をひっぱたいた。

啜り泣きと、排尿の音がタイル壁に響く。

三人で酔っ払い、もつれるように店を出た。入り口の階段を下り
たところで順子がしゃがみ、嘔吐する。

「あー、汚い。服についてんじゃん」と詰った。

男がついに、「なあ、もうこんなことやめようぜ」と言い出した。「わかったわよ。あなたたちとはここまでね。けっきょく、あたし一人死ねばいいんだ」

すると順子が立ち上がり、据わった目で睨みつけ、「お願い、死なないで」と言った。

「うるさいな。もう許してやるから帰れよ。あたしの命はあたしのだ。あたしが殺して何が悪い！」

駐車場に並ぶ他の車を蹴飛ばす。車道に飛び出し、クラクションを鳴らされた。びっくりして転倒する。

惨めで、情けない自分が笑えた。もう、どうでもいい。

暴れるあたしを男が捕まえ、ミニバンに押し込めた。順子も続いて乗り込んでくる。

車が走りだす。スピードを上げ、赤信号に突っ込んだ。

あたしはハイになり、大声で歌を歌った。順子がまた吐き、あたしもつられてゲロを吐いた。車を汚された男が何かを喚いている。窓を全開にしたが臭いが去らない。

風が吹き込んで暴れる。

急ブレーキ。急発進。

7・乳白色

高速湾岸線の脇道を飛ばし、橋をいくつか越えると、順子を殺すために男と計画した埠頭につく。

夜の工業団地には誰もいない。

車を下りると、容赦のない寒さが吹き付けてきた。

「体、温めようよ」とあたし。

順子が不安そうに、「どうやって?」と訊く。

「二人であたしを殴るの」

「できないよ」

「どうして。みんな学校で、あたしを面白そうに殴ったじゃんかッ」
言っているうちに、感情が高ぶり爆発した。順子の髪の毛をつかんで振り回し、路上に引きずり倒す。転んだ彼女の上に馬乗りに座った。

男が突っ立っているの、「なにやってんの。早く、こいつを殺してッ」と叫んだ。

順子が潤んだ目で見上げ、「殺して……いいよ」と言う。

男が駆けてきて、サッカーボールのように彼女の顔を蹴り上げた。衝撃が胸を突く。

男はそのまま背を向け、車の後ろにしゃがみ込んでしまった。泣いているみたいだ。

両手で、顔の右側を押さえている順子。血が出ている。

気がつくのと、自分も涙をこぼしていた。

「もういいよッ。みんな許す。誰も巻き込まずに、あたしだけ死ねばいいんだ」

すると順子も下から抱きついてきて、「静香が死んじゃ駄目……」。

私が死ぬ。私が悪かったんだよ」と泣きながら言った。

「もうやめよう!」。男も叫んだ。「俺もひどいことした。死なないでくれッ」

胸が熱くなり、苦しくなる。もう充分だ。涙が溢れた。傷ついた順子を抱き起こし、あたしたちは泣いた。許そう。もう全部許そう。

ミニバンで工業団地を離れると、よれたフェンスの向こうに雑草が茂る空き地が広がっていた。そのなかにいくつか、戦艦のような影が月明かりに浮かんで見えた。

順子が男に、「止めて」と言った。

「みんなで、あそこに行ってみない？」

「……顔、痛くないか」

瞼が腫れ上がった順子を気遣って男が言う。

「うん、大丈夫。静香も行こう」

あたしは頷いた。

フェンスを乗り越え、草のなかに足を踏み入れると雪の感触。暗いから気をつけるよ」。男が言う。

霜を踏みしめながら影に近付くと、それは鉄骨建ての工場の廃墟だった。その周りに、たくさんの不法投棄されたゴミが散乱している。

錆の浮いた冷蔵庫、パソコン、タイヤ、作業着、ブルーシート。

その周りに雑草が生え、雪が積もっている。

あたしたちは静かにそれを眺めていた。

工場の外壁はスプレーで落書きされ、ところどころ剥がれ落ちている。窓のガラスは割れ、置き去りにされた機械の影が見えた。

「寒いし、そろそろ戻らないか」。男が言った。

「もう少しだけ」と順子が言う。それから、独り言のように、「綺麗だね」と呟いた。

「どこが綺麗だよ。ゴミだらけじゃないか」

「そうだけど。……でも綺麗だよ。冷たくて」

あたしは何も応えず、その殺伐とした光景に見入っていた。どこ

か懐かしい気さえする。あたしの心を描いた絵のようでもあり、片木律子の心のようにだとも思った。

「スーシーさんもロボットですか」

どこからか、彼女の声が聞こえてくるような気がした。

「行こう」

男が先に歩き、あたしと順子が続く。

とても疲れた。帰ったら、お風呂に入ろう。

それから、沢山のことをやり直さなくちゃいけない。本当に大変なのは、これからだろう。

ミニバンまでたどり着き、あたしたちは振り返った。

霞んだ冷気の向こうに、朝日が輝く。乳白色に満たされる。

家に帰ると、ママに玄関で抱きしめられた。出勤前のオジサンには非難がましい目を向けられたが、あたしが見返すと何も言わずに出て行った。

ママはあたしの背中を押して居間に通し、ソファに座らせると、それから忙しく動いた。ココアを入れ、パンを焼き、風呂を沸かしてくれた。

「静香。ママね、ずっとあなたの為にお祈りしてたの。一晩中、ずっとよ」

相変わらずトンチンカンだと思った。

ママにはけっきょく、あたしの苦しみが理解できない。宗教なんか関係ないのに。

それでも、ママの言葉は嬉しかった。

ママはママなりに、あたしを愛してくれていた。それがあたしの困難を、少しも減らしてくれるものではなかったとしても。

「じゅん、ママ」

「……静香」

「いつも、ありがとう」

泣きだしたママを見て、優しくなりたいとあたしは思った。

8 ・また会えるから

学校に復帰したあたしには、いくつかの越えなければならぬ闘いが待っていたが、順子が味方してくれたから、絶望感はもうなかった。

順子に続いて何人かのクラスメートも味方についてくれるようになる、クラス全体の雰囲気が変わった。

虐めといったところで、明確な理由のない、ただの確認行為だったのかもしれない。

和解には程遠い停戦に過ぎないが、とりあえずあたしは、以前のように虐められることはなくなった。

それでも、仲良くなることは難しいし、味方に回ってくれた者にも不信感が残る。

けれどあたしは、ときどき思うようになってしまった。あたしの暴力を受け入れ、散らばる廃棄物を綺麗だと語った順子の気持ちを。せいぜい黒羽根の天使にしか理解されないと思っていた自分の存在。だけどあたしも、順子のことをわかっていなかった。

理解なんて簡単じゃない。そうだけど、わかりたいと思う。

ママのことも。

片木律子のことも。

夏休みも終わりがけたある日、あたしは再び思い立ち、病院に電話をかけてみた。

対応に出た職員に、入院中の片木律子に取り次いでくれるよう頼んだが断られた。ただし面会は可能と言われたので、翌日会いに行くことに決めた。

今度は事前に行き方を確認し、早い時間に家を出た。ケータイも忘れずに持つ。

新宿で、地下鉄から中央線に乗りかえ一時間。下りた駅で差し入

れのお菓子を買う。それからバスに乗り、蛇行する坂道を上った。雪山が近くに見えたから、遠くの病院だと思っていたが、それでも東京都内だった。

緑の向こうに、白い外壁の病院が見えてきた。

病院につくと、受け付けで名前を書き、三階のドアの前でインターホンを押す。すると中からドアを開けてもらえた。

面会室で待っていると、看護師が片木律子を連れて現れた。

「片木さん。スーシーだよ。元気にしてた？」

話し掛けるが、表情が虚ろでポカンとしている。あたしのことが思い出せないらしい。

クッキー菓子の入った箱を開け、二人で食べた。

「残りは、他の人にあげてね」

あたしはそう言ったが、片木律子は食べ続け、完食してしまった。

「あのさ、前に葉書をくれたよね。二十四世紀がお母さんに会いたがってるって書いてあったけど、どういう意味？」

彼女は応えない。

カリクメサン、オトナシサン……。いつか口に使っていた独り言を呟いてみたが、それでも彼女は無反応だった。

また会いに来ようと思い、席を立つ。

駅に戻るとお腹が空いたので、構内にある立ち食い蕎麦屋で狐うどんを食べた。汁まで飲むと汗が吹き出す。

ホームで電車を待つ間に聞こえてきた、蝉たちの悲鳴。焼けるような光線。

電車のなかでケータイが震えだす。ママからのメールで、何時頃に帰宅できるか訊ねてきた。もう帰りの電車に乗っているから、と返信を返した。

9・生きること

家に帰ると玄関に二足の知らない靴があったので、ママの宗教仲間が来ているのがわかった。会いたくなかったが、居間の前の廊下を抜けるときに中から話し掛けられた。

「こんにちは、静香さん。お邪魔しています」

普段なら無視するところだが、今日はなぜか声に引かれて居間に入った。

ママと同年代の女が二人、テーブル席とソファに腰掛けている。

あたしが立っていると、アイスコーヒーのグラスを盆に乗せたママがキッチンから戻ってきて、座るように促した。

「ごめんなさいね」。先にソファに座っていた女が席をつめてくれた。

四人で他愛のないお喋りをし、そろそろ部屋に戻ろうとソファを立つと、隣の女が、「今度、静香さんも話を聞きにいらっしやいよ」と言った。

テーブル席の女も明るい声で、「そうよ。今度の日曜日に道場にいらっしやい」と言った。

「でもあたし、神様なんて嫌いだから」と言い返す。

「神様はあなたを愛していますよ」と女。

「だったら、どうしてみんな、こんなに悲しいんですか」

「悲しい?」。テーブル席の女は、あたしの言う意味がわからなかったようだ。首を傾げる。

横に座る女がそつと手を重ねてきて、「神様もそうよ。人間を愛しておられると同時に、悲しんでいらっしやいます」

ママが、「あのね、今は、世界の終わりのときなの。もうすぐ、すべてが浄化されるわ」

「人が死んだらどうなりますか」。あたしは隣に座る女に訊ねた。

「魂は輪廻します。でも選ばれた者たちは霊的ステージを上げ、成

仏します」

テーブル席の女が補足する。「成仏するってことは、神様にお仕えできることなの」

仏教と、キリスト教的終末観の奇妙なミクスチャー。

「自殺した人はどうなりますか」

「自殺はいけないことだわ」。隣の女が言った。「罰を受けて、無念の思いを抱えたまま迷うことになるの」

「輪廻したり成仏したら、死ぬ前のことは覚えていきますか」

「みんな忘れてしまいますよ」

「思い出すこともないですか」

「話を聞きにいらっしやい。そうすればわかるわ」。テーブル席の女が言った。

部屋に戻り、ベッドに寝転がっていると、黒羽根の天使が降りてきて座った。

「久しぶりに会えたね」

「君が私の言葉を、あまり望まなくなっただから」

「でもあたし、宗教の人たちと話していたら、あなたの言葉の方がずっと好きだって気付いたよ」

「自分の意志で死にきつた者こそ幸せになれる、という話しか」

「そう。あたしも自殺者は幸せになれるって信じてる」

「でも君は、生きてみようと思った」

「そうだけど、あたしはたまたまラッキーだった。順子もいたし、あなたもいてくれた。でも、クダラナイ世界が容易に終わらない人たちもいる。あたしだってめちゃくちや苦しんだから、あなたも生きよう、なんて簡単には言えない」

「でも君は、生きてほしいと願うんだな」

「そうだよ。これはあたしのワガママかもしれないけど。みんな死なないでっと思う」

「片木律子とも、また会えると思うのか」

「うん。あたし、彼女の友達になりたいんだけど」

「人間らしい考えだ」。天使は笑った。
それが黒羽根の天使とのお別れだった。
また寂しい夜が繰り返されるかもしれない。でも、今度は耐えて
みよう。いろんな場所で、みんなが寂しく、苦しんでいるように。
たまに順子とメールのやりとりをする。面白いこと。悲しいこと。
つまらないこと。
とにかくあたしは、生きようとしている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2265a/>

幸せの廃棄物

2010年10月8日12時01分発行